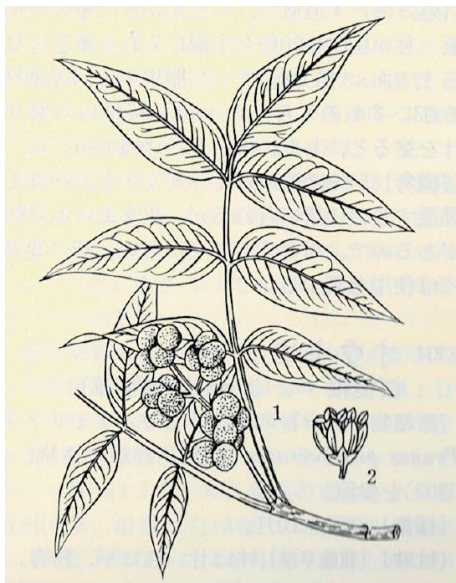


黄柏に関して



キハダ（中薬大辞典より）

日本・中国北部・朝鮮半島に自生するミカン科の落葉高木でキハダ(*Phellodendron amurense*)の樹皮を用います。

主成分はアルカロイドのベルメリンで抗菌作用(大腸菌・赤痢菌・チフス菌など)があるため昔の中国の公式文書(紙)はキハダの汁で染められたものがあるほどです。実際に日本の正倉院にはキハダで染められた写経用紙が残されています。

ベルベリンを含む黄柏エキスには抗菌作用の他にも抗炎症、中枢抑制、降圧、健胃作用などがあり古来より黄柏を主成分とする民間薬が作られました。

胃腸薬として奈良の^{だらにすけ}陀羅尼助・信州のお^{ひやくそう}百草・山陰の^{ねりくま}練熊などが有名です。

陀羅尼助の語源は寺院でお経を読む時、眠気防止に利用されたからとの説もあります。

漢方では清熱解毒、除湿、清虚熱の効果があることから下痢、糖尿病、黄疸、膀胱炎、痔、帯下、肺結核、湿疹、腫れ物などに利用されてきました。

「下焦の湿熱を取る」と言われることから下痢や排尿異常、性器疾患、下肢の神経症状など下半身の病気によく用いられました。

煎じた液を用いて眼の洗浄をしたり、口内炎や扁桃炎などの含嗽薬にも用いられました。

打身薬として大黄や梔子(クチナン)の粉末と混合し水で練って湿布する。

《黄柏が入る漢方薬処方》

滋陰降火湯＝肺結核や慢性気管支炎に用いられる。

知柏地黄丸(煎じ薬) [文書の重要な部分を引用して読者の注意を引いたり、このスペースを使って注目ポイントを強調したりしましょう。このテキストボックスは、ドラッグしてページ上の好きな場所に配置できます。]

＝慢性尿路疾患（膀胱炎・腎盂炎・血尿や排尿痛など）

荊芥連翹湯＝皮膚疾患、皮膚炎、にきびや皮膚化膿症など、

七物降下湯＝本態性高血圧など、